64

大江医家史料館の開館について

カトリーナ　シバタ・川嶌眞人
医療法人玄真堂川嶌整形外科病院

中津市は、蘭学を中心とした史料が数多く保存、展示されている町として知られている。平成十六年（二〇〇四）七月二十二日に開館した大江医家史料館には、長い間医家として利用された村上医家史料館に次いで、多くの史料が残っている。この史料館は、医家の形跡を残したまま改築されており、日本医学史には欠かせない貴重な史料を目にすることができる。

昭和六十年（一九八五）に市の指定有形文化財に指定された大江医家は中津市鷹匠町にあり、平成十三年（二〇〇一）に故人の遺志を継いだ遺族によって中津市に寄贈された。中津市は、これを「史料館として使う」という方針のもと、その改築に一年の年月と四七〇〇万円の費用を掛け、大江医家史料館を完成させた。

大江医家は、安政七年（一八六〇）の建設当時、敷地面積八〇三・三六平方メートル、旧延床面積一五二・八五平方メートルであった。これを史料館にするため、現延床面積一七〇・四六平方メートルに幾分増築したが、江戸時代からの建築様式と間取りはそのままである。また、この史料館には、室内案内表示や仏壇、調剤室の窓に至るまで、その当時の固有の特色が沢山残っている。しかし、年月が過ぎ、内部が空洞化していたので、改築が必要だった。まず、昔からの素材と古色塗装を使用し、古くから伝わる工法で施工を行った。土壁の塀は鉄筋コンクリートにし、垂木から上を全て撤去し、新しく屋根下地を仕上げた。大江家はこの建物を病院兼家屋として使用しており、調剤室、待合室、診察室、二階の倉庫などは、今日も現存している。そして展示品の殆どは、その二階の倉庫から発見された。さらに庭園部分は草園として復元されており、様々な薬草を見ることができる。

現在史料館には、七十八の展示品が飾られている。展示品の中には、『和蘭全躯内外分合図』がある。この図は、蘭訳されたドイツの解剖書を訳した『阿蘭陀経

路筋脈臓腑図解』が元となっており、安永元年（一七七二）に刊行された。また、安永三年（一七七五）、西洋医学を紹介するために前野良沢・杉田玄白らによって日本で初めて訳された『解体新書』の初版本や彼らに蘭学を学んだ大槻玄沢がその改訂版として刊行した『重訂解体新書』が展示されている。蘭学の影響を受けた眼科医の柚木太淳は、寛政八年（一七九七）、官より刑死体をもらい受け解剖した。そして、彼がこれをもとに、眼球の解剖について著した『柚木流眼療秘伝書』も展示されている。

天保一二年（一八四一）、五代目の大江雲澤は、華岡青洲医塾の大坂分塾（合水堂）に入門し、華岡流の外科学を学んだ。青洲は、麻酔薬としてのマンダラゲの効果を応用して、日本で初めて全身麻酔による乳癌手術を行った医師として知られている。大江家で発見された『華岡青洲所診画帳』には、その乳癌の手術やその他様々な疾患、手術などが記録されている。また、『華岡青洲画像』には、自作の漢詩が添えられており、青洲は華岡塾の卒業生にこの画像を贈った。

大江雲澤は、明治四年（一八七一）に設立された大分県で最初の医学校、中津医学校の校長に就任した。それ以前に雲澤は医塾を開設していた。そこでの雲澤の講義を弟子の大江寛と伯容が口述筆記した。それが『雲澤先生痢疾口授』という雲澤の著書として大江医家史料館に残っている。『雲澤塾入門帳』には、四四名（塾生の出身地は、萩、秋月、阿波など）の入門者があったことが書き留めてあり、雲澤の知名度が高かったことを示している。大江雲澤は、「医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す」の医訓で有名である。今でも残っている雲澤の書は、医のリスクマネジメントの観念に大きな影響を及ぼしている。